

《書評》

エルンスト・パンツェンベック著『一つのドイツの夢：カール・レンナーと
オットー・バウアーにおける合邦思想と合邦政策』（御茶の水書房，2022年）

太田仁樹
（岡山大学名誉教授）

1. はじめに

2022年3月に御茶の水書房より、『一つのドイツの夢：カール・レンナーとオットー・バウアーにおける合邦思想と合邦政策』^(注1)が出版された。著者の青山孝徳氏はオーストリア社会主義運動史に関する原典や研究を精力的に翻訳・紹介している。^(注2)本訳書もその一環であると思われる。

わが国ではオーストリアのマルクス主義（オーストロ・マルクス主義）については、ヴィクトル・アドラー、カール・カウツキー、ルドルフ・ヒルファディング、マックス・アドラー、フリードリヒ・アドラーなどの名が知られているが、オーストリアの政治舞台における重要人物といえば、カール・レンナーとオットー・バウアーを挙げねばならない。政治史においては、レンナーを右派、バウアーを左派と位置づけて対比されることが多いが、^(注3)民族政策においては、スターリンの『マルクス主義と民族問題』（1913）^(注4)がハプスブルク帝国時代のレンナーとバウアーを重ねて批判している影響が強く、両者の主張の差異が覆い隠されていた。レンナーとバウアーの民族理論の相違点については、近年の研究が徐々に明らかになっているところであるが、本書は、両大戦間期の両者の相違及び、第2次大戦後のレンナーの議論も踏まえた民族政策の変転を論じて、読む者の関心を離さない。

レンナーとバウアーの議論の出発点となった「ブリュン民族綱領」までのオーストリアの歴史を簡単に辿ってみよう。13世紀後半にスイス北部のハプスブルク伯爵ルドルフが、神聖ローマ帝国のローマ王に選出されたことから、ハプスブルク家は、全ヨーロッパ政治において重要な役割を果たすようになった。カール5世の時代になって、その領土は、ドイツ、ハンガリー、ネーデルランド、ブルゴーニュ、スペインおよびその植民地（新大陸、フィリピン）に広がり、文字通り世界帝国を形成した。カール5世は息子のフェ

(注1) 原著は Panzenböck, E., *Ein deutscher Traum. Die Anschlussidee und Anschlusspolitik bei Karl Renner und Otto Bauer*. Wien: Europaverlag, 1985である。

(注2) 青山氏の最近の訳業としては、以下のものがある。

リチャード・リケット原著『オーストリアの歴史』成文社、1995。

ジークフリート・ナスコ原著『カール・レンナー：1870～1950』成文社、2015。

ジークフリート・ナスコ原著『カール・レンナー：その蹉跌と再生』成文社、2019。

アルベルト・フックス原著『世紀末オーストリア1867～1918：よみがえる思想のパノラマ』昭相堂、2019。

批判的研究者のロクーム・イニシャティヴ、ミヒャエル・ブックミラー原著『カール・コルシユのアクチュアリテイ』こぶし書房、2019。

アントン・ベリンカ原著『カール・レンナー入門』成文社、2020。

オットー・バウアー原著『資本主義の世界像』成文社、2020。

アンドレアス・ピットラー原著『オーストリア現代史：1918～2018』成文社、2021。

(注3) 第1次大戦後の社会化政策についてのレンナーとバウアーの理論的相違についての青山孝徳の論考も貴重である。

Aoyama, T., *Sozialisierungstheorie von Otto Bauer und Karl Renner: ein Vergleichsversuch*, 『経済科学』27(1), 1979。

(注4) Сталин, И. В., *Марксизм и национальный вопрос*. Институт Маркса-Энгельса при ЦК ВКП (б) (ред.), И. В. Сталин сочинения, т. 2, Москва, 1951. スターリン全集刊行会訳、マルクス主義と民族問題、『スターリン全集』第2巻、大月書店、1952。

リベ2世にスペインを中心とする領地を譲り、弟のフェルディナント1世には中欧の領地を継承させた。前者をスペイン系ハプスブルク、後者をオーストリア系ハプスブルクと呼び、後者が近世の強国ハプスブルク君主国の基となった。ハプスブルク君主国は典型的な「礫岩国家 (conglomerate state)」であり、ハプスブルク家の家領である帝冠 (王冠) 領 (Kronland) の連合体であったが、ナポレオン支配下の1804年にオーストリア帝国へと編成替され、1815年以降のウィーン体制において指導的地位を占めた。

19世紀を通して勢力を増大してきたプロイセン王国と、1848年革命を頂点とする従属的諸民族集団の民族運動、自由主義運動、社会主義運動により、オーストリア帝国は行き詰まりに直面した。1866年の対プロイセン戦争での敗北により、神聖ローマ帝国の継承組織であるドイツ連邦は解散し、ドイツ語圏におけるオーストリア帝国の指導的地位は消滅した。1867年ハンガリーのナショナリストとアウスグライヒ (Ausgleich, 妥協) することにより、オーストリア帝国は、ハンガリー王国とその他の地域に分割され、オーストリア=ハンガリー二重君主国となった。ハンガリー王国以外の地域はツィスライタニエン (Cisleithanien, ライタ川の此岸) と呼ばれる。これ以降、「オーストリア帝国」の呼称は二重君主国全体を指すこともあるが、ツィスライタニエンのことを指すようになる。オーストリアの統治者にとって民族問題とは、主にこの地域におけるドイツ人、チェコ人、ポーランド人、ルテニア (ウクライナ) 人、イタリア人、スロヴェニア人、クロアチア人などの民族集団間の抗争をどう調停し、君主国全体の秩序を維持するかという問題であった。

1888/1889年に成立したオーストリア社会民主党 (Sozialdemokratische Partei Österreichs : SPÖ) は内部において諸民族集団の利害対立に苦しみながら、ツィスライタニエンおよび二重君主国全体の再編問題に取り組むことになり、1899年のブリュンの党大会において、民族綱領 (「ブリュン綱領」) を採択した。ブリュン綱領は帝冠領の集合体であったハプスブルク君主国の行政区画を廃棄し、居住する民族の状況に合致した民族的構成国家を形成したうえで、その連邦組織として君主国を再編成するという、属地 (領域) 主義原理に基づく改革案であり、19世紀のヨーロッパで盛り上がった「一民族一国家」という民族性原理を取り入れると同時に、連邦の枠組みによりそれを制限するという性格を持ったものであった。第1次大戦における敗北によるハプスブルク君主国の解体により、ブリュン綱領は意味を失くし、従属的諸民族集団の分離・独立後の残余となったドイツオーストリアの第1共和国の与党となった社会民主党は、小さくなった祖国の生き残りのためにドイツとの合邦 (Anschluß) を目指したが、戦勝国はそれを認めなかった。20年後、合邦はナチス・ドイツによるオーストリア共和国の解体と併合という形で「実現」したが、レンナーとパウアーはそれに対して異なった対応をおこなった。パウアーはナチスの敗北を見ることなくパリに客死したが、レンナーはナチスからの解放後、5年の余生を得て、第2共和国の大統領として、オーストリア民族という概念に祖国の進路を託した。

本書はこの過程を以下の5章で、合邦をめぐるレンナーとパウアーの議論を検討し、民族理論に及んでいる。

第1章 民族問題解決のためのカール・レンナーとオットー・パウアーの思想。

第2章 ドナウ帝国における民族自治から民族性原理へ、そして1918年11月12日の合邦声明へ。

第3章 合邦政治家としてのオットー・パウアーとカール・レンナー。

第4章 ナチスに直面した社会民主党の合邦思想。

第5章 カール・レンナーによる合邦思想の拒絶。

以下、本書の叙述に沿って著者の議論を紹介した上で、若干のコメントを付してみたい。